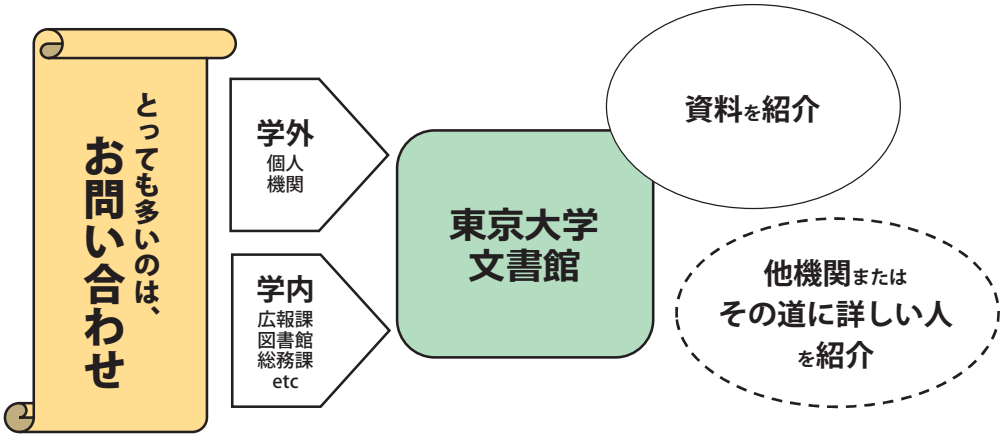
東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 66, Mar. 2021

文書館のさまざまな役割 ～資料も人もつなぐ 編～

目録作成、閲覧提供、利用審査…
業務はいろいろありますが…



■所蔵資料の利用例 --- 大学の教育活動の一環として ---

大学院生 → 指導教員 → 広報課 → 文書館：資料や関係者を紹介 →
研究／インタビュー → 授業発表 → 当館への成果フィードバック

バーチャル安田講堂

S0041/0029
[紛争による建物被害写真] をもとに

元の白黒写真　AI による自動カラー補正に手動カラー補正を加えた写真　現在の写真

プロジェクトメンバーに聞いてみたところ・・・

本学への帰属意識も高まった。オンラインでは伝わりにくいところもあったので、直接インタビュイーにお会いした。インタビュイーの皆さんが好意的だった。

プロジェクトの詳細は 5 ページに☞

当館 HP ではカラーでご覧いただけます。
https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400154498.pdf

Contents

2　文書館と東京大学百五十年史　佐藤　愼一

4　東京大学文書館デジタル・アーカイブのアーカイブ連携　宮本　隆史

5　AIとカラー化写真でつくりだすバーチャル安田講堂　大野 雅貴、鈴木 晶、寺本 明日香、安川 隼、塩塚 大気、田丸 裕己

6　資料の公開について

7　業務日誌（抄）（2020年8月～2021年1月）

8　文書館トピックス　YouTube「東京大学文書館チャンネル」の公開　逢坂　裕紀子

東京大学文書館チャンネル

公開のお知らせ

学内事業のオンライン開催に伴い、当館もオンラインコンテンツを作成・公開しました。
https://www.youtube.com/c/UTArchives
→詳細は、8ページに！

東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

文書館と東京大学百五十年史

東京大学特命教授　佐藤　愼一

1．はじめに

教育と研究という、主として現在と未来に関わる任務に打ち込む東京大学の教員は、過ぎ去った東京大学の歴史に対して無関心な者が多いと言われる。以下の①～⑤は、東京大学史に関するごく基本的な○×式のクイズである。全問正解の東大教員は何割くらいいるだろうか？

① 1877 年 4 月 12 日の東京大学設立時に存在した学部は、法・医・工・文・理の 5 学部である。

②恩賜の銀時計は、東京帝国大学卒業生のみに与えられる栄誉で、他の帝国大学の卒業生には与えられなかった。

③ 1946 年 11 月 3 日の日本国憲法公布と同時に、東京帝国大学は東京大学に名称変更した。

④設立から現在に至るまで、東京大学には女性の学部長はひとりもいない。

⑤ 2021 年 4 月 1 日に総長に就任する藤井輝夫氏は、第 31 代東大総長である。

平素は大学の歴史に無関心な教員であっても、大学が大きな転換期や危機に直面した時は、否応なしに大学の歴史に関心を持たざるを得なくなる。そのような体験が筆者には二回ある。東大紛争（1968・69 年）と国立大学法人化（2004 年）である。東大紛争のとき筆者は法学部 4 年生で、帝国大学由来の東京大学の重々しい伝統的権威が音をたてて崩れ去る様を目撃した。そして国立大学法人化のとき、文学部長であった筆者は、法人化対策の司令塔として設けられたＵＴ 21 会議（座長：佐々木毅総長）の一員として、開校以来はじめてとなる設置形態の変更が東大に何をもたらすかを考え込んでいた。

筆者は 2014 年 4 月の東京大学文書館設置と同時に初代文書館長に就任し、以後、文書館顧問、特命教授と立場を変えつつ、文書館の運営と『東京大学百五十年史』（以下『百五十年史』という。）の編纂に関わってきた。筆者がこれらの仕事を進んで引き受けた背景には、これらの体験によって触発された東京大学史に対する強い関心が存在する。

2．『東京大学百年史』との出会い

筆者は 2001 年 4 月に文学部長に就任し、文学部長室で『東京大学百年史』（以下『百年史』という。）に出会った。刊行の時点で文学部に寄贈され、以来学部長室の片隅に埋もれていたものと思われる。『百年史』の存在は知っていたが、手に取ったのはこれが初めてであった。

その頃、国立大学を法人化することは政府の既定方針となっていた。設置形態の変更という、東京大学がこれまで経験したことのない事態の到来を目の前にして、学内も学外も楽観論と悲観論が交錯しており、冷静に物事を判断するためには、東京大学の現在を、東京大学の長い歴史の中に相対化して捉える必要があると思われた。そうしたときに『百年史』が手近な場所にあるのは実にありがたいことで、執務の合間に気軽に読むことができた。全 10 巻、総計 12000 頁に及ぶ大著を通読する余裕は流石になかったが、通史編の興味ある個所はほぼ目を通し、はじめて知ることの多さに驚いた。当時の筆者は、冒頭に記したクイズのおそらく半分以上に不正解だったであろう。

東京大学の歴史を知るうえで『百年史』にまさる書物はない。立花隆氏は『天皇と東大』の執筆に際して、『百年史』のセットを古書店から 20 万円で購入したと書いている。ただしこの書物は、読みたいと思う者が気軽に利用できる書物ではなかった。その多くは、東京大学から関係諸機関に寄贈され、そのまま死蔵されているのであろう。現に筆者も、文学部長を終えて学部長室を退去したあとは、利用機会を失った。

東京大学文書館は昨年 2 月、総合図書館等と協力して『百年史』を東京大学学術機関リポジトリ（UTokyo Repository）で公開し、全国津々浦々の人々がインターネットを使って簡単に利用できるようにした。この一事を以てしても、文書館設置の意義は明らかだと筆者は考えている。

3．私設文書館

文書館長に就任する以前から、筆者の執務室はあたかも私設文書館の様相を呈していた。筆者はかなりの頻度で全学の公務に関わり、関連する大量の文書資料が溜まっていたからである。

例えば筆者は 1996 年度に総長補佐を務めた際、柏キャンパスに設置する新研究科の構想取りまとめを命じられた。当初は 4 つの研究科（基盤科学研究科、先端生命科学研究科、環境学研究科、国際協力学研究科）を設置する構想であったが、様々な事情で 1 研究科に圧縮することを余儀なくされ、1997 年 8 月、急遽フランスから帰国した蓮實重彦総長が新領域創成科学研究科と命名した。筆者の手許には、この一連の経過を示す多くの内部資料が残された。

あるいは文学部長だった 2001 年から翌年にかけて、筆者は東京大学憲章の起草委員に任命された。法人化以後の大学運営の憲法に当たる東京大学憲章の制定は、佐々木毅総長が最も力を入れた事業のひとつで、筆者は他の 4 名の部局長と共にこの事業に参画し、憲章草案が約 1 年をかけて徐々に修正される過程を示す一連の記録が筆者の手許に残された。

文書を捨てられない性質の教員でも、自宅には置く場所がないから、定年定職の際に大部分を廃棄するのが普通である。ところが筆者の場合、東京大学教授を定年退

職した翌日に濱田総長のもとで東京大学理事に就任し、このため書類は廃棄の運命を免れた。のみならず、5年間の理事時代を通じて手許に残る書類の分量は加速度的に増加した。主に教育と入試を担当した筆者は、「行動シナリオ」の策定、秋入学の導入、学部教育の総合的改革、推薦入試の導入など事業に関わったが、これらの事業に関連する膨大な内部資料が新たに加わったからである。筆者の執務室は、まさに私設文書館状態となった。

ちなみに「行動シナリオ」は濱田総長在任中の行動計画を提示する文書で、筆者は取りまとめ責任者であったが、実際に企画と執筆を担当したのは、濱田総長が全学から抜擢した七名の中堅世代の教員である。「七人の侍」と呼ばれた彼らの中には、五神真現総長と藤井輝夫次期総長が含まれている。

4．文書館の館長へ

筆者が2014年3月に東大理事を退職した時、東大教授を退職した5年前と比べて、ふたつの点で条件が変化していた。第一に、筆者の所蔵する文書資料が質的にも量的にも格段にレベルアップした。第二に、『百五十年史』の編纂を開始すべき時期が近付いていた。東京大学が創立150周年を迎えるのは2027年のことだが、きちんとした『百五十年史』を作成するとしたら準備に10年を要すると考えられた。そして、筆者が蓄えた資料は『百五十年史』の有力な資料になるはずであった。筆者が関わった事業の多くは、『百五十年史』において多くの頁を割いて取り上げられるはずの重要な案件であり、かつ筆者の持つ資料は、単に結果のみを伝える資料ではなく、結果に至る過程をも示す資料なのである。

筆者の年齢を考えれば、実際に『百五十年史』を執筆するのは、筆者ではなく、筆者よりも一世代か二世代若い教員の仕事となる。彼らは、取り上げる案件を自らの体験としては知らない。彼らの執筆作業が容易になるよう、資料の整理などの基礎作業の面で筆者が貢献できること――敢えて言えば、筆者にしかできないこと――があるのではないかと考え、濱田総長に筆者の考えを伝え、非常勤職員で構わないから『百五十年史』編纂の基礎作業を行なう機会を与えて頂けないかとお願いした。濱田総長はたまたま東京大学文書館設置の準備を進めていたところで、筆者を特任研究員として雇用し、文書館長に任命して下さった。こうして筆者は、文書館と『百五十年史』の双方に同時に関わることになったのである。2014年4月のことであった。

5．『東京大学百五十年史』を目指して

『百五十年史』の準備作業で最も必要なことは、東大紛争以後の東大史の整理を行なうことで、筆者が先ずやったことは、東大紛争期に創刊された『学内広報』をひたすら読んで、東京大学の歴史の流れを把握することだった。その上で筆者が行った作業は以下の3つである。

(1) 資料の入手と整理

かつて東大で管理運営の要職を務め、東大または第二の就職先を定年退職しようとしている知人に依頼し、彼らが保持している文書資料を文書館に寄贈してもらった。「文書館収蔵資料は半永久的に保存可能」と言うと殆どの人が寄贈に同意してくれ、それでも迷う人には「ご遺族が迷惑する」と言うと、全員が応じてくれた。寄贈資料の白眉というべきは小早川光郎名誉教授（法学部）の資料である。行政法のエキスパートとして国立大学協会の法人化対応戦略策定の担い手となった小早川氏は、国立大学法人法の生みの親と言ってもよく、氏から頂戴したダンボール箱10個分の資料はまさに宝の山であった。

多くの方から提供された資料は、整理して大型ドッジファイルに綴じた。将来の利用者の便宜ために資料目録と資料解題を作成するつもりだったが、他の仕事に追われ、作業は遅れている。

(2)『百五十年史』予備原稿の作成

『百五十年史』の執筆者たちの参考資料として、テーマ別の予備原稿を書いた。取り上げたテーマは、「東大紛争」「東大紛争後の大学改革」「学院化と大学院重点化」「柏新キャンパスと新領域創成科学研究科」「国立大学法人化」「行動シナリオ」「秋入学と学部教育の総合的改革」等で、いずれも『百五十年史』で取り上げられるはずの重要テーマである。筆者が把握している事項を全て書き込んだから、分量は極めて多い。「国立大学法人化」は59万6千字、「秋入学と学部教育の総合的改革」に至っては76万7千字もある。読まされることになる『百五十年史』の執筆担当者は、拷問に感じるかもしれない。

最初に取り組んだのは「東大紛争」だった。加藤代行執行部の10時間に及ぶ座談会記録を文書館が保管しており、それらの新資料を駆使して、大学側の視点から捉えた東大紛争の記録を書くことが出来た。初めての試みだと思う。

(3) 東大史関係者のインタビュー

3人の元総長（有馬朗人総長、吉川弘之総長、蓮實重彦総長）をはじめ、東大史の生き証人と呼ぶべき人々にインタビューを行った。3人の元総長はいずれも協力的で、生い立ちに始まり、総長としての活動の背後にあったものを詳細に語って下さった。インタビューは、有馬先生が10回、吉川先生が11回、蓮實先生が7回に及び、許可を得て全て録画と録音をすることができた。2020年12月に急逝された有馬先生の元気なお姿も、映像にしっかりと収められている。総長インタビューの画像と音声が東大文書館の最も貴重な所蔵資料となることは疑いない。

コロナ・ウィルス流行のため、元総長へのインタビューは中断を余儀なくされているが、流行がおさまり次第、若い世代の教員たちが引き継いでくれるであろう。『百五十年史』編纂準備作業の中には、既に存在する文書資料の収集整理だけではなく、生き証人へのインタビューを積極的に行って新たな資料を作り出すことも含まれているのである。

（さとう　しんいち）

東京大学文書館デジタル・アーカイブのアーカイブ連携

東京大学文書館助教　宮本　隆史

デジタル・アーカイブの効用のひとつは、性質の異なる複数の資料目録の連携が容易になったことにある。その促進のために、東京大学文書館デジタル・アーカイブ[1]では、国際標準にもとづいた方法でデータを提供している。目録項目は標準的なメタデータの語彙に可能な限りマッピングし、JSON-LD、RDF/XML、Turtle、N-Triples などのデータ形式で取得可能にしている［図 1］。本稿では、こうしたデータが、外部サービスを通じてどのように利用できるかを紹介したい。

2018 年度に、国立公文書館とのアーカイブ連携が開始された。国立公文書館デジタルアーカイブの「横断検索画面」[2]からは、連携している複数のデジタル・アーカイブとの横断検索が可能である。この機能によって、タイトル、参照コード、年代域、作成者名称といったメタデータの横断検索が可能である［図 2］。一方で、東京大学文書館で公開している目録情報でも、組織歴や資料の伝来などといった情報は検索対象ではない。この機能では、連携する情報を絞り込むという選択を行なっている。

タイトル	加藤弘之関係資料（カトウヒロユキカンケイシリョウ）
年代域	1640（寛永17）年～1918（大正7）年頃
参照コード	F0001
記述レベル	フォンド
資料区分	歴史資料等
資料の規模	1,519点
作成者名称	加藤弘之
組織歴・伝記的経歴	天保7（1836）年6月23日～大正5（1916）年2月5日。但馬国出石城下谷山町に、出石藩士の加藤正照の長男として出生。家は代々甲州流兵学師範役。藩校弘道館で学んだ後、佐久間象山に師事し、大木仲益（後の坪井為春）のもとで蘭学を学ぶ。万延元（1860）年、蕃書調所教授手伝となり、元治元（1864）年には幕府直参となり開成所教授並に任ぜられる。明治政府における役職。左院・元老院の議官等を経て、明治10（1877）年、開成学校綜理、次いで東京大学設置に伴い法理文三学部綜理に任ぜられる。明治23（1890）年、第二代帝国大学総長に任ぜられる。明治26（1893）年に総長辞職、帝国学士院長等を務めた。
記録史料伝来	本資料群は入手経緯の異なる3種の資料群から成る。; (1)1975年から1978年にかけて、加藤家より、日記・草稿等・蔵書・事例類等150点及び袋入り史料4袋の寄託を受け

図 1：東京大学文書館デジタル・アーカイブ上の「加藤弘之関係資料」（F0001）の目録ページの一部

東京大学内では、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業が、「東京大学学術資産等アーカイブズポータル」[3]を公開し、学内の諸部局が独自に公開してきたコレクションを横断的に検索可能としている。このシステムでは、学内の多くのコレクションで使われている多様なメタデータを、「内容記述」という項目にマッピングするという戦略をとっている［図 3］。東京大学文書館では独立した目録項目としている「参照コード」「記述レベル」といった情報は、この「内容記述」項目にマッピングされている。

インターネット上では、多様な資料の目録が公開されており、さまざまなメタデータの語彙が使われている。分野ごとにメタデータの標準化が進んでいるとはいえ、データ集約するシステムが多様な語彙すべてに対応することは困難である。本稿で紹介したふたつの横断検索サービスは、目録項目を絞って取得するか、ひとつの語彙にマッピングして集約するという戦略をとっている。資料群の構造や資料どうしの関係などより粒度の高い情報を集約することは、横断検索機能の安定的な提供という目的からは、優先度が低く見積もられていると考えられよう。こうした情報を利用したい場合には、東京大学文書館デジタル・アーカイブを利用することができる。

項目	内容
Title	加藤弘之関係資料
Identifier	F0001 https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/document/ce428687883421141200 3e08b1b1e8ac
Date	1640（寛永17）年～1918（大正7）年頃
Creator	加藤弘之
Language	日本語
Subject	フォンド
Rights	http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/

図 2：国立公文書館デジタルアーカイブの「横断検索画面」から取得した「加藤弘之関係資料」（F0001）の目録情報

図 3：東京大学学術資産等アーカイブズポータルから取得した「加藤弘之関係資料」（F0001）の目録情報

アーカイブ連携の文脈では、集約される際に情報量が少なくなることは避けられない。一般的にシステムの設計は、費用や技術を含む諸制約を前提とした、ある時点での均衡と捉えられる。デジタル・アーカイブの利用者は、こうした制約を前提としてシステムがいかに設計されているかを理解し、ひとつのシステムに全てを求めるのではなく、目的に応じてどのシステムを活用できるかを見定めることが生産的であろう。一方で、サービスの提供側は、連携サービスが構築されても個別のデジタル・アーカイブの重要性が減じないことを認識し、メタデータ語彙の標準化だけではなく、ユーザインターフェイスの標準化といったことについても分野ごとに議論を深めることが重要であろう。

（みやもと　たかし）

[1] http://uta.u-tokyo.ac.jp/uta
[2] https://www.digital.archives.go.jp/globalfinder/cgi/start
[3] https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal

AIとカラー化写真でつくりだすバーチャル安田講堂

東京大学大学院学際情報学府　修士課程１年
大野 雅貴、鈴木 晶、寺本 明日香、安川 隼、塩塚 大気、田丸 裕己

私たちは学際情報学概論Ⅱという講義において、渡邉英徳授のもとで「安田講堂の白黒写真を、AI（Artificial Intelligence）による自動カラー化とインタビューを組み合わせることで着彩し、バーチャルに拡張された過去の安田講堂を制作する」という活動に取り組んだ。

まず最初に、文書館を通じて安田講堂の歴史に関する調査や資料の収集を行った。安田講堂は1925年の建設以降、修繕や改修を複数回経験しているが、最も変化が大きかったのは1960年代後半の東大闘争によるものであると言われている。そのため竣工時から東大闘争までの時代の安田講堂を再現し、現在の様子と比較した。比較を行うために文書館などを通じて当時の写真を入手したが白黒だったため、既存サービスを用いたAIによる自動カラー化を行なった。しかし、当時の講堂の正確な色合いや質感を完全に把握することはできなったため、当時の様子を知る方々へのインタビューを行い、手動で着彩した。このAIによる自動カラー化とインタビューを組み合わせた手法は、庭田・渡邉らの手法を参考にした。[1]

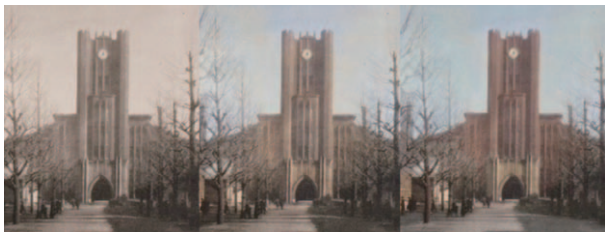


写真１　1930年代の安田講堂をカラー化したもの[2]
（左から順に、元の白黒写真・AIによる
自動カラー補正写真・手動でのカラー補正写真）

インタビューは、東大闘争当時や安田講堂の修繕前に東京大学に在学されていた方４名を対象に行った。現在と大きく異なっていると考えられた壁面の色に加えて、建物の傷や質感、講堂前の広場の様子に焦点を当てて調査を行った。インタビュイーは、AIによる自動カラー化された当時の安田講堂の写真を見ながら、それぞれの記憶を解凍し、自分たちにとってどのような場所であったのかなど思い出のエピソードと共に語っていただいた。

AIによる自動カラー化では安田講堂の壁面の正確な色味を把握することは困難だったが、インタビュイーに「もう少し赤みがかかっており、今の安田講堂と色味は似ている」という意見をいただくことができた。調査を進めると、安田講堂のレンガは竣工当時から現在に至るまで同じ素材を使っているということが明らかになった。また、東大闘争時は講堂から落とされたレンガや石が地面に多く落ちており、その中に壊された講堂のレンガが一部混入していたということも明らかになった。また、現在は各行事における記念撮影スポットになっている講堂前芝生エリアが、当時はコンクリートで覆われていたことが示唆された（写真１）。コモンズなどの学生同士が交流できる場所が整備されていなかった当時の学生にとって、安田講堂前の広場が学生同士の交流の場として機能していたという役割の違いも地面のテクスチャに注目することで新しく発見することができた。

このように、AIによる自動カラー化に加えてインタビューを行い着彩を行うことで、白黒写真から得ることができなかった当時の安田講堂の役割や情報を知ることができた。これらの情報をもとに、本学に在籍する学生であるTokoroらが制作した「バーチャル安田講堂」の3DCG（3D Computer Graphics）に修正を加え、バーチャルに拡張する準備を行なった（写真２）。権利の関係で各VR（Virtual Reality）プラットフォームで公開することはできなかったが、AIによる自動カラー化だけでなくインタビューを通じて得られた主観的事実に基づいて3DCGを編集することで、過去の安田講堂の本質を抽出し再構築することができたのではないだろうか。

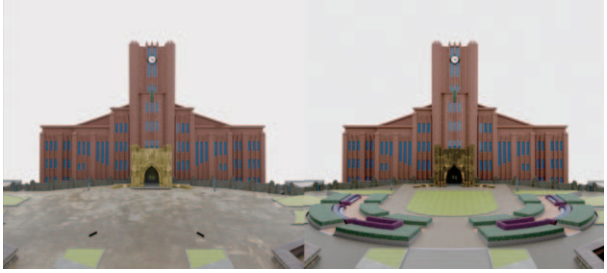


写真２　竣工当時（左）と現在（右）の
バーチャル安田講堂3DCGレンダリング画像

計測データなどの客観的事実に加えて、主観的事実を次の世代に伝える媒体として3DCGやVR技術を用いたデジタルアーカイブが今後重要になるのではないかと感じた。最後に、インタビューに協力してくださった４名の方と渡邉英徳教授にこの場を借りて感謝申し上げたい。

（おおの まさき、すずき あきら、
てらもと あすか、やすかわ しゅん、
しおつか だいき、たまる ゆうき）

---

[1] Anju Niwata and Hidenori Watanave: “Rebooting Memories”: Creating “Flow” and Inheriting Memories from Colorized Photographs; Proceedings of SIGGRAPH ASIA 2019 Art Gallery/Art Papers, Article No. 4, pp 1-12, November 2019.

[2] 東京大学文書館デジタル・アーカイブ 経済学部卒業記念写真帖　昭和５年３月 F0025/S01/0014

資料の公開について
（2020年8月1日～2021年1月31日）

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

（新規登録資料群＝★）

※概要記述とアイテムリスト（目録）は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます（https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home）。

特定歴史公文書等

事務

S0013　事務協議会関係
S0202　ホームカミングデイ企画・実施
S0216　柏地区安全衛生管理
S0264 ★ 部長会・連絡課長会
S0311　総長と報道機関等との懇談会
S0312　報道機関対応
S0342　事務長会議
S0353　土地・施設等取得・譲渡
S0369　外国学校等卒業学生特別選考
S0370　入試実施委員会
S0375　入試教科委員会
S0377　入試追跡調査
S0380　入学試験問題
S0384　国立大学協会入試委員会
S0434　環境安全本部 防火・防災関連会議資料
S0452　女性研究者支援モデルプラン
S0472 ★ 学生生活実態調査
S0482 ★ 入学式
S0483 ★ 卒業式
S0519　環境安全本部年報
S0525　職務発明認定書
S0572 ★ 処分制度検討委員会
S0577 ★ 文京区との事務担当者協議会
S0578 ★ 大学院問題懇談会
S0581 ★ 被災地支援等のための調達
S0549 ★ 定員貸借関係綴（過員承認）
S0550 ★ 情報セキュリティ委員会
S0551 ★ 外国人留学生獲得広報活動
S0559 ★ 要人来学関係
S0561 ★ 次世代育成支援対策事業
S0562 ★ 等級別定数管理簿
S0563 ★ 定員管理・人員配置関係
S0564 ★ 株式等管理台帳・取得関係

大学院・学部

S0233　教育学部附属中等教育学校　教官会議
S0234　教育学部附属中等教育学校時間割表
S0247　工学系研究科総合研究機構運営
S0249　工学系研究科・工学部　国際交流委員会
S0254　工学系研究科・工学部　情報システム委員会
S0259　薬学系研究科・薬学部　教授会・教授総会
S0267　総合文化研究科・教養学部　実験時における倫理審査
S0272　総合文化研究科・教養学部　委員会
S0278　総合文化研究科・教養学部　運営諮問会議
S0283　医学部運営委員会
S0291　理学系研究科・理学部　教授会
S0292　理学系研究科・理学部　諮問委員会
S0293　理学系研究科・理学部　教育推進委員会
S0294　環境安全研究センター　教員会議
S0295　理学系研究科・理学部環境安全研究センター運営委員会
S0299　理学系研究科・理学部　企画室会議
S0300　理学系研究科・理学部　学術運営委員会
S0301　国立大学理学部長会議
S0304　アジア生物資源環境研究センター　教員会議
S0332　農学生命科学研究科委員会、教育会議
S0333 ★ 新領域創成科学研究科研究倫理審査
S0363　医学部教務委員会
S0387　インテリジェント・モデリング・ラボラトリー運営
S0394　附属病院　事故調査委員会
S0396　附属病院　執行諮問会議
S0397　病院運営審議会
S0406　公共政策学教育部専門職学位課程　入学試験問題
S0429　教養学部学友会　（大学事務及び教員評議会関係）
S0431　駒場祭
S0442　薬学系研究科・薬学部　ヒトを対象とする研究倫理審査委員会
S0444　薬学系研究科・薬学部　委員会関係
S0462　グローバル30プログラム代表者会議
S0473 ★ 三鷹国際学生宿舎運営委員会関係資料
S0474 ★ 三鷹国際学生宿舎宿舎生会関係資料
S0479　工学系研究科・工学部　運営会議資料
S0497　日韓遠隔交換講義検討ワーキンググループ
S0503　総合文化研究科図書委員会・駒場図書館運営委員議事録
S0523　理学系研究科・理学部　各種委員会名簿
S0531　薬学系研究科　委員会議事録
S0536　理学系研究科　原子核科学研究センター（CNS）運営事務
S0543　教養学部PEAK時間割作成
S0565 ★ 公共政策学教育部運営諮問会議
S0566 ★ 教養学部　オリエンテーション委員会
S0574 ★ 文学部　教務委員会
S0575 ★ 八大学文学部長会議
S0583 ★ 農学生命科学研究科　入試委員会

附置研究所

S0211 ★ 物性研究所　所員会
S0212　委員会名簿
S0217　海洋研究所教授会
S0218 ★ 大気海洋研究所　陸上共同研究（柏地区・国際沿岸海洋研究センター）
S0219　大気海洋研究所　研究船共同利用
S0337 ★ 宇宙線研究所共同利用運営委員会
S0378　医科学研究所倫理審査
S0379 ★ 物性研究所共同利用施設専門委員会
S0553 ★ 女子中高生理系進路支援事業
S0554 ★ 気候システム研究系共同研究
S0555 ★ 海洋アライアンス連携研究機構運営
S0556 ★ 物性研究所委員会名簿
S0558 ★ 大気海洋研究所　学際連携研究
S0560 ★ 地球観測データ統融合連携研究機構運営委員会
S0567 ★ 生産技術研究所　産学連携委員会
S0568　大気海洋研究所　共同研究運営委員会
S0569 ★ 国際沿岸海洋研究センター運営
S0580 ★ 東洋文化研究所　学内各種委員会委員
S0585 ★ 社会科学研究所　教授会・所員会・研究員連絡会議

全学センター

S0552 ★ スーパーコンピューティング専門委員会
S0557 ★ T2Kオープンスーパーコンピュータ関連

歴史資料等

教員資料

F0020 ★ 岡野行秀関係資料
F0162 ★ 市村宗武関係資料

学生資料

F0175 ★ 渡辺貞幸関係資料

その他

F0025　史料室アルバム

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌（抄）
（2020 年 8 月～ 2021 年 1 月）

※（本）: 於本郷本館、（柏）: 於柏分館

8 月 5 日	令和 2 年度 第 1 回文書館運営委員会（オンライン）
8 月 6 日	資料移送（本郷→柏）
8 月 7 日	第 15 回館員オンライン会議
8 月 13 日	夏季休業（～ 8/14）
8 月 20 日	第 16 回館員オンライン会議
8 月 28 日	第 17 回館員オンライン会議
8 月 31 日	森本、国立公文書館アーカイブズ研修 I 出講 宮本、総合研究棟建物管理専門委員会出席（オンライン） 逢坂、国立公文書館アーカイブズ研修 I 参加（～ 9/4） 収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
9 月 2 日	佐藤特命教授、森本、秋山、国立大学協会資料受入打ち合わせ（国大協）
9 月 7 日	ロボット掃除機導入（柏）
9 月 8 日	F0265 仁田實関係資料寄贈 収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布及び隙間ブラシ交換（本）
9 月 9 日	駒羽会（東京大学バドミントン部 OB・OG 会）より参考図書寄贈
9 月 10 日	森本、世田谷区公文書管理委員会出席
9 月 13 日	医学部 1 号館計画停電（本）
9 月 14 日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（オンライン）
9 月 16 日	森本、国立公文書館次期「電子公文書等の移管・保存・利用システム」要件定義書作成にむけた仕様検討に係る助言（第 1 回） 逢坂、千代田、『アーカイブ OSS フォーラム 2020 ～ Archives Space を使ってみよう！～』ウェブ勉強会参加 隙間ブラシ全室交換（柏）
9 月 17 日	森本、秋山、逢坂、柏一般公開用動画制作打ち合わせ
9 月 25 日	森本、総務課と文書移管打ち合わせ（本）
9 月 28 日	秋山、百五十年史編纂作業打ち合わせ（オンライン）
9 月 29 日	森本、総務課と文書移管打ち合わせ（本） 第 67 回館員打ち合わせ（柏）
9 月 30 日	『東京大学文書館ニュース』65 号刊行 収蔵庫空調停止（本） 収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布及び隙間ブラシ交換（本）
10 月 2 日	森本、世田谷区公文書管理委員会出席
10 月 3 日	逢坂、科学研究費による出張（～ 10/4）（愛知・京都）
10 月 9 日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（本） 防災訓練参加（柏）
10 月 12 日	F0267 造林学研究室旧蔵資料確認・寄贈
10 月 14 日	森本、宮本、逢坂、デジタルアーカイブ打ち合わせ（柏）
10 月 15 日	森本、国立公文書館アーカイブズ研修 III 出講 秋山、千代田、「学術資産としての工学史料」研究会参加（オンライン）
10 月 16 日	YouTube「東京大学文書館チャンネル」開設
10 月 17 日	第 19 回ホームカミングデイ（文書館展示 YouTube オンデマンド「東京大学文書館へようこそ」） 東京大学柏キャンパス一般公開 2020 オンライン開催（～ 10/31）
10 月 19 日	森本、東京都公文書管理委員会出席 防災訓練参加（本）
10 月 20 日	書庫全室除湿機稼働終了（柏）
10 月 21 日	森本、国立公文書館次期「電子公文書等の移管・保存・利用システム」要件定義書作成にむけた仕様検討に係る助言（第 2 回） 環境整備 T による書架清掃（～ 10/23）（柏） 工学・情報理工学図書館よりアルバム寄贈（F0025/S05/0152）
10 月 22 日	森本、ビジネス・アーキビスト養成講座出講（オンライン）
10 月 27 日	宮本、東京大学ハラスメント予防担当者連絡会議出席（柏）
10 月 28 日	収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布及び隙間ブラシ交換（本）
10 月 30 日	森本、文化資源学講義出講（オンライン） 第 68 回館員打ち合わせ（柏） 柏図書館展示撤収 コンバット全室撤去（柏）
11 月 2 日	秋山、赤塚好仁会理事長インタビュー参加（本）
11 月 5 日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（本）
11 月 6 日	森本、世田谷区公文書管理委員会出席 駒羽会（東京大学バドミントン部 OB・OG 会）より参考図書寄贈 収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
11 月 12 日	森本、近現代建築アーカイブズ研修会出講 収蔵庫空調停止（柏）
11 月 13 日	森本、国立公文書館アーカイブズ研修 III 出講 秋山、千代田、「学術資産としての工学史料」研究会参加（オンライン）
11 月 17 日	秋山、赤塚好仁会理事長インタビュー参加（本）
11 月 18 日	磁気テープ資料（S0528, F0014）のデジタル化を委託（柏）
11 月 20 日	逢坂、科学研究費による出張（～ 11/21）（大阪・京都）
11 月 27 日	森本、京都大学大学文書館外部評価委員会出席
11 月 29 日	収蔵庫 671・663 号室、施設による空調調査（柏）
11 月 30 日	森本、三重県公文書等管理審査会出席（オンライン）
12 月 2 日	第 69 回館員打ち合わせ（本） 秋山、平野財務部長インタビュー参加（本） 秋山、井上、国文学研究室資料調査（本）
12 月 8 日	収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
12 月 11 日	森本、世田谷区公文書管理委員会出席 国立公文書館によるデジタルアーカイブ・システム標準仕様書説明・意見交換（柏）
12 月 15 日	森本、秋山、国立大学協会資料確認
12 月 16 日	国文学研究室より学生運動関係資料寄贈 環境整備 T による書架清掃（～ 12/21）（柏） 燻蒸作業業者打ち合わせ（柏）
12 月 18 日	森本、八王子市公文書館整備に関する有識者検討会出席
12 月 24 日	国立大学協会より資料受入 森本、三重県公文書等管理審査会出席（オンライン）
12 月 25 日	第 70 回館員打ち合わせ（柏） 宮本、部局 CISO 会議代理出席（オンライン）
1 月 6 日	教員打ち合わせ（オンライン）
1 月 7 日	収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
1 月 8 日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（オンライン）
1 月 11 日	東大の活動制限指針をレベル 1（制限－小）に引き上げ
1 月 12 日	F0029 佐藤鋹五郎関係資料追加寄贈
1 月 14 日	収蔵資料炭酸ガス燻蒸（～ 2/3）（柏）
1 月 19 日	資料移送（本郷⇔柏）
1 月 22 日	秋山、名古屋市立日比野中学校にて「職業人講話」担当（オンライン）
1 月 26 日	第 71 回館員打ち合わせ（柏）

文　書　館　ト　ピ　ッ　ク　ス

YouTube「東京大学文書館チャンネル」の公開

東京大学文書館では、2020 年 10 月に動画共有サービス YouTube 上に「東京大学文書館チャンネル」を開設しました。チャンネル開設から 3 ヶ月を経過した 2021 年 1 月末現在、3 本の動画を公開し、視聴総回数は約 1,000 回、チャンネル登録者数は 98 人を記録しています。ここでは、文書館 YouTube チャンネル開設についてご報告します。

写真 1：YouTube「東京大学文書館チャンネル」トップページ

新型コロナウイルス感染症の影響により、東京大学主催の公開イベントの多くが中止、あるいはオンライン開催となりました。2020 年度の東京大学ホームカミングデイおよび柏キャンパス一般公開がオンライン開催となったことを受けて、当館では例年の実空間展示にかわって動画のオンライン公開を実施することとしました。公開のための動画配信プラットフォームは、利用者数の多さやコンテンツ管理のしやすさ、展示期間終了後も継続してコンテンツを提供できる点などを踏まえて、動画共有サービス YouTube（www.youtube.com）を選択しました。

まずはホームカミングデイと柏キャンパス一般公開の参加者に当館の活動内容を知ってもらうことを目的として、文書館の概要を伝える「東京大学文書館ってどんなところ？」、そして所蔵資料を紹介する「総合図書館建設：本郷本館の所蔵資料紹介」および「五月祭：柏分館の所蔵資料紹介」の 3 本の動画を制作し、2020 年 10 月に公開しました。制作にあたっては、視聴者の負担を考えて各動画が 3 分程度の長さになるように台本を作成し、撮影を行いました。編集作業と図やテキスト表現のアニメーション制作には、それぞれ Adobe のソフトウェア Premiere Pro と After Effects を用いています。動画には森本祥子准教授、秋山淳子助教をはじめとする館員が出演し、オープニングアニメーションに星野厚子学術支援職員による三味線演奏を使用するなど、館員の全面協力のもと上記 3 本の動画が完成しました。開催期間中の動画再生回数は 700 回を超え、結果的に実空間での展示よりも多くの人に文書館の展示コンテンツを観ていただくことができました。

写真 2：「東京大学文書館質問コーナー」サムネイル画像

東京大学文書館チャンネルでは、当館の活動を広く発信するツールとしても今後も定期的に動画を公開していく予定です。2021 年 2 月には新たに「東京大学文書館質問コーナー」を公開しましたので、ぜひご覧ください。YouTube チャンネルを通じてより多くの方に文書館への関心を深めてもらい、利用促進につながる魅力あるコンテンツを提供していきたいと思います。

YouTube 東京大学文書館チャンネル URL：https://www.youtube.com/c/UTArchives

（逢坂 裕紀子）

東京大学文書館ニュース　第 66 号　　ISSN 0915-3284

発行日：2021 年 3 月 31 日（年 2 回発行）
編集・発行：東京大学文書館
〒113-8654　東京都文京区本郷 7－3－1
電話：03（5841）2077（直）
https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html

印刷所：松枝印刷株式会社